佐賀県文化財調査報告書第105集

特別史跡

名護屋城跡並びに陣跡　6

――古田織部陣跡発掘調査概報――

1991年

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第105集

特別史跡

名護屋城跡並びに陣跡　6

――古田織部陣跡発掘調査概報――

1991年

佐賀県教育委員会

序

文禄・慶長の役（1592～1598年）に際して、玄界灘に面する東松浦半島一帯に構築された名護屋城と諸大名の陣屋の跡は、その多くが400年を経過した今も良好な状態で残存しており、名護屋城跡と19の陣跡が特別史跡に指定されています。

本県では、この壮大な遺跡群の保存と活用のため、昭和51年度から「名護屋城跡並びに陣跡保存整備事業」に取組んできました。昭和60年には保存整備計画を策定し、これまでに実施してきました豊臣秀保・堀秀治陣跡に続き加藤嘉明陣跡の発掘調査・環境整備を、また名護屋城跡の石垣修理を行っています。この保存整備事業と関連して、日本と朝鮮半島との交流に暗い影を落としたこの戦乱の反省のうえに立ち、今後の両国の理解と交流を目的とした「佐賀県立名護屋城跡資料館（仮称）」の建設を進めているところです。

この報告書は、茶人としても有名である古田織部陣跡の発掘調査概要報告書です。古田陣は名護屋城跡と堀秀治陣跡の中間にあり、豊臣秀保・鍋島直茂・片桐且元・木下延俊陣跡等とともに一つの歴史的空間を占める重要な陣跡であります。昭和63年度から４カ年計画で発掘調査を実施し、平成４年度から環境整備を行う予定です。

「名護屋城跡並びに陣跡」は広い地域に点在しているため、地域開発との調整等問題は多々ありますが、地元町・関係機関等の御協力、文化庁・保存整備委員会の御指導・御助言を得て、今後とも本事業の促進に努める所存です。今後ともよろしくお願いいたします。

なお、今回の調査に御協力をいただいた地権者の方々をはじめ、関係各位の御援助と御配慮に対し、深く感謝いたします。

平成３年３月

佐賀県教育委員会
教育長　志　岐　常　文

例　　言

1．本書は、国庫補助を受け昭和63年度から４ケ年計画で実施している「古田織部陣跡発掘調査事業」に係る昭和63・平成元年度及び平成２年度の一部を加えた調査の概要報告書である。

2．遺構の実測・写真撮影は、調査員の他宮武正登(現佐賀県文化財課)・筑丸義久・小笹松二・明瀬たまみ・山本りえ・松本美保が行い、また遺構実測の一部は新九州測量設計株式会社に委託した。

3．本書の作成にあたっては山本が製図を行い、山本・松本の協力を受け調査員が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　調査の経過と概要 …… 1

1．調査の経過 …… 1

2．周辺の環境 …… 2

3．調査の組織 …… 3

Ⅱ　遺跡の概要 …… 6

1．立地と遺構 …… 6

2．遺構の概要 …… 13

Ⅲ　小　結 …… 31

挿図目次

Fig. 1　陣跡分布図 …… 4
Fig. 2　古田織部陣跡周辺地形図 …… 7
Fig. 3　〃　地形測量図（S＝1/1,500） …… 9
Fig. 4　〃　調査区設定図（S＝1/400） …… 10
Fig. 5　〃　遺構配置図（S＝1/300） …… 12
Fig. 6　ＳＢ01掘立柱建物跡実測図（S＝1/80） …… 14
Fig. 7　ＳＢ02掘立柱建物跡（S＝1/80） …… 17
Fig. 8　ＳＫ01・02土壙実測図（S＝1/40） …… 20
Fig. 9　石垣①実測図（S＝1/80） …… 23
Fig.10　石垣④実測図（S＝1/80） …… 24
Fig.11　石垣④・③実測図（S＝1/80） …… 25
Fig.12　1－Ｆ区階段実測図（S＝1/40） …… 28

図版目次

PL. 1　古田織部陣跡全景 …… 1
PL. 2　名護屋城跡山里口 …… 2
PL. 3　堀秀治陣跡本曲輪 …… 3
PL. 4　古田織部陣跡１・４調査区（南西から） …… 11
PL. 5　古田織部陣跡３・４調査区（北西から） …… 〃
PL. 6　ＳＢ01・02掘立柱建物跡（南西から） …… 15
PL. 7　ＳＢ01掘立柱建物跡（北西から） …… 〃
PL. 8　ＳＢ02掘立柱建物跡（南西から） …… 16
PL. 9　〃　（北東から） …… 〃
PL.10　ＳＢ03掘立柱建物跡、ＳＫ01・02土壙（南西から） …… 18
PL.11　ＳＢ04掘立柱建物跡（南東から） …… 〃
PL.12　〃　（南西から） …… 19
PL.13　ＳＡ02柱穴列(南西から) …… 〃

PL.14　ＳＡ01柱穴列(南西から) …… 〃
PL.15　ＳＫ02土壙（　〃　） …… 20
PL.16　ＳＫ01土壙（　〃　） …… 〃
PL.17　石垣①　（南から） …… 26
PL.18　石垣③　（南西から） …… 〃
PL.19　石垣③・④角部（西から） …… 〃
PL.20　石垣④　（北から） …… 27
PL.21　〃　（北西から） …… 〃
PL.22　〃　（西から） …… 〃
PL.23　１－Ｆ区階段（南西から） …… 29
PL.24　〃　（北東から） …… 〃
PL.25　〃　（南西から） …… 〃
PL.26　４区集石状況（南西から） …… 30
PL.27　ＳＤ01溝跡（北西から） …… 〃
PL.28　１－Ｈ区土層状況（南東から） …… 〃

Ⅰ 調査の経過と概要

1．調査の経過

文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱1592～1598年）に際し、その本営地となった東松浦半島北部には、豊臣秀吉の居城である名護屋城を中心に、半径３kmほどの圏内に全国諸大名の陣屋が120カ所以上築かれ、およそ400年を経過した現在もそれらの遺構が良好な状態で残存している。

本県教育委員会では、この壮大な遺跡群の保存と活用のため、文化庁・名護屋城跡並びに陣跡保存整備委員会の指導・助言を受け、昭和51年度から「名護屋城跡並びに陣跡保存整備事業」を実施している。この遺跡群が鎮西町・呼子町・玄海町の３町に点在することもあり、保存整備事業のうち発掘調査・保存修理・環境整備を県が担当し、特別史跡の追加指定・公有化を各町が担当している。これまでに豊臣秀保・堀秀治・加藤嘉明陣跡の発掘調査及び環境整備と名護屋城跡の石垣修理を行っている。昭和60年には保存整備事業の一層の促進を図るため「名護屋城跡並びに陣跡保存整備計画」を策定（昭和63年に改訂）し、平成４年度までの短期計画とそれ以降の長期的方針を決めるまでに至った。今回調査を行った古田織部（重然）陣跡は、名護屋城跡の南約500mの丘陵に位置し、堀秀治・豊臣秀保・鍋島直茂・片桐且元陣跡等と一つの歴史ゾーンを構成している。特にこのゾーンの陣跡については積極的な保存・活用を図ることにしており、平成元年８月14日に鍋島陣とともにこの古田陣も特別史跡に追加指定された。また、古田陣については、「織部」の呼称で親しまれているように、焼物・茶の名匠ということもあり、これまでと違った整備方針を模策し、調査の成果によっては陣屋（数寄屋等）の復元も考慮することになったのである。

調査はまず昭和63年度に古田陣の地形測量から開始し、平成元年度から本格的な発掘調査を行っている。平成元年度は、この陣の主要をなす三方を石垣で囲まれた曲輪の調査を実施し、掘立柱建物跡・柱穴列（塀跡？）・土壙・玉砂利・石垣等を検出している。調査地がミカン畑であったため、調査前の予想よりはるかに開墾の手が加えられ、当時の遺構面よりかなり下がったレベルでしか遺構を検出できず、当初予定の面積まで達することができなかった。

なお、古田陣の調査は平成３年度まで実施し、平成４年度から発掘調査の成果を基に環境整備を行う予定である。

PL.1　古田織部陣跡全景

2．周辺の環境

名護屋城跡並びに陣跡は、佐賀県の北西部、玄界灘に面した東松浦半島北端の鎮西町・呼子町・玄海町に点在する。東松浦半島は、玄武岩質溶岩に厚く覆われた起状の多い広大な台地であり、通称「上場台地」と呼ばれている。この半島の西及び北側は突出した岬と複雑な湾入をもつリアス式海岸で、天然の良港となっている。また、この地は壱岐・対馬を経て朝鮮半島とは約190kmの近い距離にあり、古代より文化流入の玄関口でもあった。

日本列島と朝鮮半島との長い歴史的交流を断絶させる不幸な出来事であった文禄・慶長の役の拠点として選ばれた名護屋の地に、豊臣秀吉より築城の命が下ったのは天正19年（1591）のことである。名護屋城跡の縄張りは加藤清正あるいは黒田孝高によるものとも言われ、西国大名の分担で翌年２月には主要部の完成をみている。わずか５ケ月足らずである。名護屋城跡の総面積は17ha あり、城の構えは本丸を中心に二ノ丸・三ノ丸・東出丸・遊撃丸等の曲輪を配し、北側下段に山里丸・台所丸を置く基本的には三段の過郭式である。名護屋城跡の調査は昭和62年度山里口より開始し、現在まで石垣修理工事に伴い遊撃丸・東出丸を行い、各曲輪の様子が明らかになりつつある。

名護屋城跡周辺３kmの丘陵には、全国諸大名の陣屋が築かれ、昭和52年度の陣跡分布調査により120の陣跡が確認されている。各陣跡の規模は大小様々であるが、遺構の遺存状況の度合から遺存度Ⅰ（石垣・土塁等により、陣跡の全容が知られるもの）、Ⅱ（Ⅰに準じるが部分的に破壊を被るもの）、Ⅲ（痕跡のみ残すもの）、その他に分類している（Tab.１）。遺存度Ⅰの陣跡は46あり全域に分布している。古田織部陣跡も遺存度Ⅰの陣跡であり、この周辺にも遺存度Ⅰの陣跡が多い。前田利家・木下延俊・稲葉重道・堀秀治・鍋島直茂・豊臣秀保・木村重隆・片桐且元陣跡等である。豊臣秀保陣跡は、全体規模が約20ha と最も大きく、第１陣について昭和53年度から55年度まで調査が行われている。第１陣の曲輪は、枡形をもつ石塁に囲まれた中心的曲輪と周囲に複数の腰曲輪を配している。石塁は高さ約２ｍあり、約60m×45m の石塁に囲まれた中に、５棟の礎石建物跡と多量の瓦・国産天目茶碗・李朝白磁等を検出した。第１陣の環境整備は昭和59年度までに終了している。豊臣陣跡の東側にある堀秀治陣跡は、全体規模が約11ha ある。昭和56年度から昭和62年度までの７年間をかけ調査を行い、主要部分の全容が明らかになっている。本曲輪のある丘陵頂部を中心に、ここからわかれて延びる低い丘陵まで全体的に遺構は分布する。

PL.２　名護屋城跡山里口

本曲輪・北西曲輪・西曲輪・北曲輪・大手曲輪等から構成されるこの陣の中で、特に本曲輪は中心をなすものである。豊臣秀保第一陣と違い、本曲輪は土塁と空堀により防御されている。本曲輪北側に大手口が付き、名護屋城と対峙する。曲輪内には6棟の礎石建物が確認され、御殿・広間・数寄屋(2)・能舞台・楽屋と推定している。このうち能舞台跡は、その規模が2.5間×3間（5 m×6 m）あり、2間×3間の楽屋跡との間には斜めに橋掛りが取付くという舞台の特徴をよくあらわしている。堀陣からは、輸入・国産陶磁器・土師器・瓦器・金属器等が出土し、また環境整備は平成3年度までに終了する予定である。周辺の陣跡ではこの他に鎮西町教育委員会により、昭和62・63年度に木下延俊陣跡、平成元年度に片桐且元陣跡、平成2・3年度の予定で木村重隆陣跡の詳細分布調査が行われており、石塁や土塁で構成される各陣屋の特徴が明らかにされ成果をあげている。

PL. 3　堀秀治陣跡本曲輪

3．調査の組織（平成元年度）

調査主体　佐賀県教育委員会

調査事務局

総　括	武藤佐久二	県文化課長兼名護屋城跡調査研究室長	
	岩崎　輝明	〃	課長補佐
庶　務	稲富　安徳	〃	庶務係長
	鶴田　明美	〃	主　　事
	直塚　清純	〃	〃
	本山　恵悟	〃	〃
調査	森　醇一朗	県文化課長補佐兼名護屋城跡調査研究室長補佐	
	田中　　徹	〃	名護屋城跡調査研究室長補佐
	東中川忠美	〃	〃　　企画調整主査
	西田　和己	〃	〃　　文化財保護主事（担当）
	松尾　法博	〃	〃　　〃
	五島　昌也	〃	〃　　〃
	山口　久範	〃	〃　　指導主事
	本多　美穂	〃	〃　　文化財保護主事

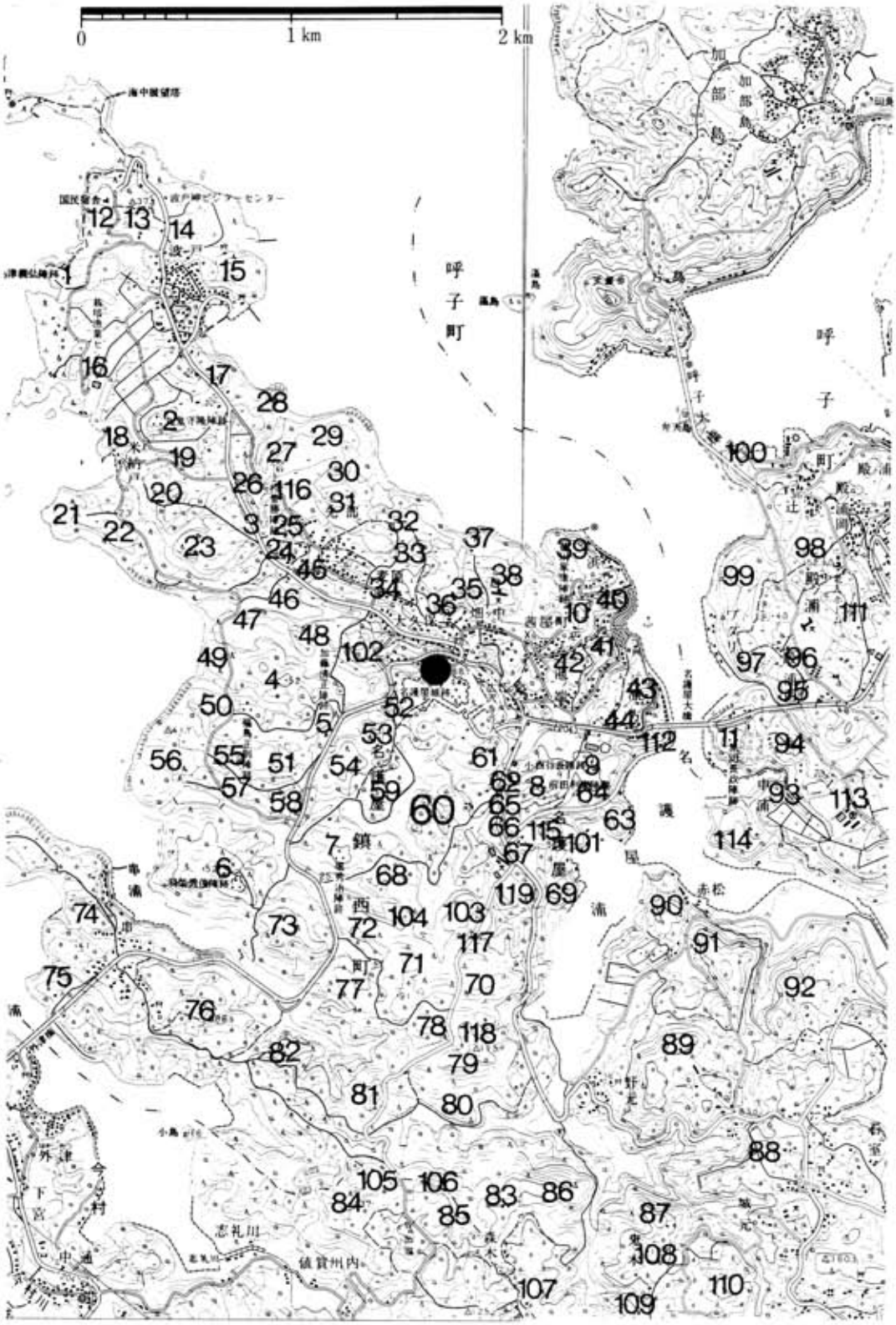


Fig. 1　陣跡分布図

● 名護屋城跡

陣跡No	参陣諸将名	城地	遺存度
城内	浅野 長政	若狭 小浜	
1	島津 義弘	大隅 栗野	I
2	上杉 景勝	越後 春日山	I
3	九鬼 嘉隆	志摩 鳥羽	III
4	福島 正則	伊予 今治	II
5	加藤 清正	肥後 熊本	III
6	豊臣 秀保	大和 郡山	I
7	堀 秀治	越前 北ノ庄	I
8	前田 利家	加賀 金沢	I
9	小西 行長	肥後 宇土	I
10	徳川 家康	武蔵 江戸	I
11	黒田 長政	豊前 中津	I
12	増田 長盛	近江 水口	I
13	北条 氏盛	(34美濃守の子)	
14	生駒 親正	讃岐 高松	I
15	佐竹 義宣	常陸 水戸	I
16	相馬 義胤	陸奥 牛越	III
17	蜂須賀家政	阿波 徳島	
18	直江 兼続	(上杉景勝の老臣)	I
19	織田 信秀	美濃	
20	秋田 実季	出羽 窪田	
21	高橋 直次	筑後 三池	II
22	宇都宮弥三郎	下野 宇都宮	
23	蒔田 広定		
24	織田 秀信	美濃 岐阜	
25	伊藤 盛景	美濃 大垣	
26	真田 昌幸	信濃 上田	
27	氏家 行広	伊勢 桑名	
28	氏家 行継		II
29	足利 義昭		
30	蒲生 氏郷	会津 若松	II
31	加藤 光泰	甲斐 甲府	I
32	長束 正家		
33	山中長俊ヵ	(秀吉の右筆・代官)	
34	北条 氏規	河内	
35	村上 義明	加賀	
36	御牧 景則	(秀吉馬廻)	
37	富田 信則		I
38	大野 治長	(秀吉馬廻)	
39	本多 忠勝	上総 小多喜	
40	大久保忠世	相模 小田原	
41	木下 吉隆	(秀吉馬廻組頭)	
42	名古屋経述	(名護屋領主)	
43	(羽柴勝雄)		
44	寺沢 広高		
45	観音寺堅珍	近江 (芦浦観音寺住持・代官)	
46	飯田覚兵衛ヵ		
47	水野忠重ヵ	伊勢 神戸	
48	小早川隆景	筑前 名島	
49	細川 忠興	丹後 宮津	I
50	松浦 鎮信	肥前 平戸	I
51	日根野高弘	信濃 高島	
52	津軽 為信	陸奥 堀越	
53	片桐 且元	播磨の内	I
54	木村 重隆	越前 府中	I
55	片桐 貞隆	播磨の内	II
56	波多 信時	肥前 唐志岳	I
57	那須 資晴	下野 烏山	
58	南部 信直	陸奥 福岡	II
59	木下 勝俊	播磨 竜野	
60	吉田 重勝	丹波の内	I
61	木下 延俊		I
62	稲葉 貞通	美濃 郡山	
63	加須屋真雄	播磨 加古川	I
64	仙石 秀久	信濃 小諸	II
65	新庄 直定	近江の内	
66	丹羽 長重	加賀 松任	
67	長宗我部元親	土佐 浦戸	
68	稲葉 重通		I
69	立花 宗茂	筑後 柳川	
70	青木 一矩	越後 大野	
71	宇喜多秀家	備前 岡山	I
72	溝口 秀勝	加賀 大聖寺	
73	鍋島 直茂	肥前 佐賀	I
74	小野木重次	丹波 福知山	I
75	菅野 達長	淡路 岩屋	
76	谷 衛友ヵ	丹波 山家	I
77	織田信雄ヵ	大和の内	
78	竹中 重門	美濃の内	
79	藤堂 高虎	紀伊 粉河	I
80	金森 長近	飛騨 高山	
81	石川 三長	父数正の代理 信濃 深志	
82	亀井 茲矩	因幡 鹿野	I
83	朽木 元綱	近江 朽木台	III
84	長谷川秀一	越前 東郷	I
85	毛利 輝元	安芸 広島	III
86	福原長堯ヵ		I
87	山内 一豊	遠江 掛川	II
88	筑紫 広門	筑後 福島	
89	石田 三成	近江 佐和山	I
90	真田源吾ヵ		I
91	結城 秀泰	下総 結城	I
92	大友 義統	豊後 府内	II
93	早川 長政	近江の内	
94	毛利 秀頼	信濃 飯田	I
95	伊達 政宗	陸奥 岩出沢	I
96	№79に同じ		II
97	来島通之ヵ	伊予ノ内	
98	宗 義智	対馬 府中	III
99	№10に同じ		I
100	加藤 嘉明	伊予 松崎	I
101	大谷 吉継	越前 敦賀	
102	毛利 吉成	豊前 小倉	III
103	前野 長康	但馬 出石	I
104	長谷川宗知ヵ	美濃の内	I
105	木下 利房	若狭 高浜	I
106	京極 高次	近江 八幡山	II
107	吉川 広家	出雲 富田	
108	№25に同じ		
109	小笠原貞政	下総 古河	
110	稲葉 重通	美濃 清水	
111	脇坂 安治	淡路 洲本	
112	(№90へ)		
113	不 明		
114	〃		I
115	〃		I
116	〃		II
117	〃		I
118	〃		I
119	〃		III
位置不明確	杉若 氏宗	紀伊 田辺	
	毛利 秀包	筑後 久留米	
	藤堂 高吉		
	山崎 家盛	摂津 三田	
	寺西 正勝		

●遺存度　Iは規模の大小にかかわりなく、石垣・土塁等により遺構の内容が知られるもの。
　　IIはIに準じ、部分的に破壊等を被るもの。　IIIは痕跡のみを残すもの。
●特別史跡　名護屋城跡並びに陣跡3　「文禄・慶長の役城跡図集」　中村質「名護屋古城之図」と陣跡図より引用
●白ヌキ数字は特別史跡

Tab. 1　名護屋参陣諸将と陣跡（文禄1年3月～2年5月）

II　遺跡の概要

1．立地と遺構

古田織部（重然）陣跡に比定されるNo.60陣跡は、東松浦郡鎮西町大字名護屋字赤玉毛に位置する。名護屋城跡から南に約500m と近接している。名護屋城跡の周辺には標高約40～80m の丘陵が点在し、その間を谷水田が走るという起伏に富んだ地形である（Fig. 2）。古田陣跡は、名護屋城跡から南へ下る谷水田の東側丘陵上にある。標高約53m の地点から北西へ細長く延びる丘陵に陣は構築されている。両側はフケタ（深田）と呼ばれる谷水田であり、天然の堀の役目を果たしている。丘陵中央には標高50～51m の細長い平坦面があり、他の陣跡で遺構に伴ってみられる海岸産の玉石が部分的に残っているが、曲輪の区画はもうひとつはっきりしない。この平坦面の北西側に、今回調査の対象とした曲輪がある。丘陵の先端部分を削平と盛土成形により曲輪を造成し、三方を石垣で囲んでいる。曲輪は約2,000㎡の広さがある。曲輪北西側に約２ｍずつの高低差がある２段の平坦面と北東側に帯曲輪がつき、さらにその周囲は谷水田へと急激に落ち込んでいる（Fig. 3）。

今回の調査は、この陣の中で最も区画が明瞭なこの曲輪を中心に行ったが、排土の関係上平坦面の約3/4を調査したにすぎず、全容を摑むまでに至っていない。調査前には表面観察で玉砂利が確認できたところから、遺構も良好に残存していると予想したが、曲輪部分がミカン畑の造成の際かなり撹乱を受けており、当初予定より遺構検出面が深く調査面積を減少せざるをえなかった。

曲輪は、南東側の標高約50m の部分を削平し、北西・北東側は盛土を行い、標高約45m で造り出している。南東側を除き三方は石垣で形成しているが、北西隅は入角状になっている。南西側石垣（石垣①）は、長さが21.5m あり、北西側が高く南東側では丘陵とすりつくように低くなっている。曲輪北西側の長さは44m あり、このうち33.5m について石垣（石垣④）が残存する。両端は約４ｍの高低差があるが、北西側に張り出す中央の平坦部では低くなっている。石垣①と④の間は入角状になっており、石垣①から続く北西に面する石垣を石垣②、南西に面する石垣を石垣③とするが、石垣②は辺が曲線であり、また石積みも新しくミカン園造成の際積み変えられたものと考えられる。ただ石垣②の根石付近については、結論付けにくい部分もあり、曲輪の輪郭をも合わせ今後の調査結果を待ちたい。石垣③は北西角部が高く、南東側は地形に合わせて低くなっている。曲輪北東側は約４ｍの高さで石垣があったと推定されるが、崩壊が著しく、部分的に痕跡を残すのみである。曲輪内部は調査の都合上４区に分け、北側を１区、そこから時計回りに２・３・４区とし、さらに各区ごとに調査区を細分して番号を付している（Fig. 4）。今回の調査では、１・３・４区の調査を行っている。前述したように全体的に撹乱が多く、遺構検出面の高低差がかなりある。ただ３区では地山（風化玄武岩）面での検

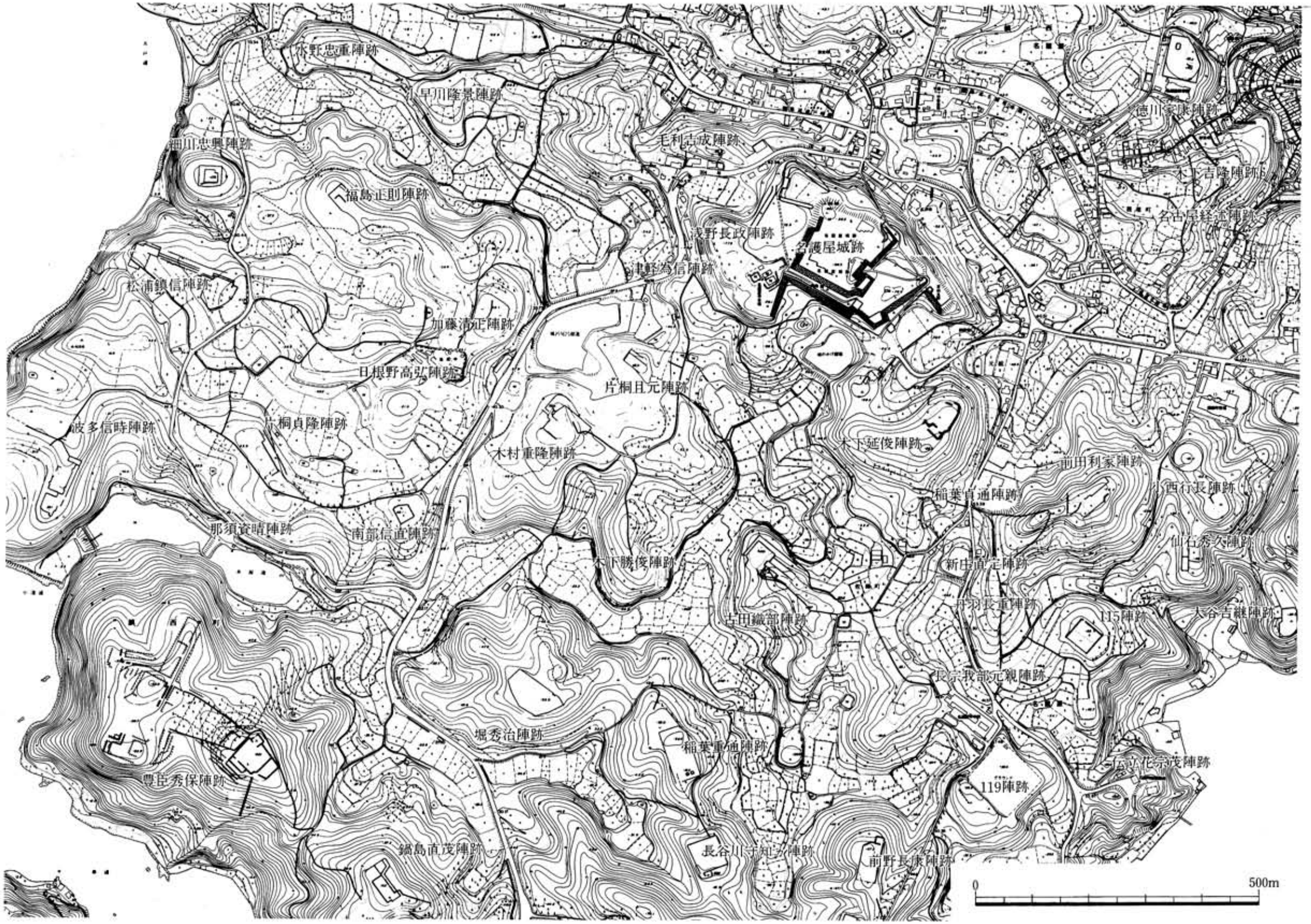


Fig. 2　古田織部陣跡周辺地形図

Fig. 3　古田織部陣跡地形測量図（S＝1/1,500）

出であったため、遺構の平面確認は容易であったが、１・４区の周縁部では曲輪成形の折盛土が行われており、撹乱面と盛土面の境の把握が困難であった。今回検出した遺構は、掘立柱建物跡、柱穴列（塀跡か）、土壙、溝跡、集石、玉砂利、階段等である（Fig. 5）。掘立柱建物跡のうちＳＢ01・02・04掘立柱建物跡は２区へ延びており、全容はわからないが、これまでの陣跡の調査の中では、堀秀治陣跡の大手曲輪の掘立柱建物跡があるが、これも陣跡の主体をなす建物でなく（堀秀治陣跡・豊臣秀保陣跡の中心となる曲輪では礎石建物跡）興味深い。柱穴列は南東側壁面に沿い、ほぼ平行に２つ並ぶ。当初建物跡とも推測したが、柱間に相違があり建物跡とは考えにくい。土壙は３区に２基ある。ＳＢ03掘立柱建物跡と切り合い、２つの土壙は同方向に並行している。溝跡は、１区に１条と３区から４区にかけての１条の計２条ある。溝は共に南東から北西に延びており、このうちＳＤ01溝跡は、ＳＢ02掘立柱建物跡と切り合い互いに関連のある施設とも考えられる。集石は４区にあり、玉砂利は３区南東側壁面に沿って部分的にみられる。階段は、１区の曲輪北西端にある。外側には石垣④があり、この地点での階段の検出は予想できなかったが、これにより石垣④の一部積み変えが明らかとなった。

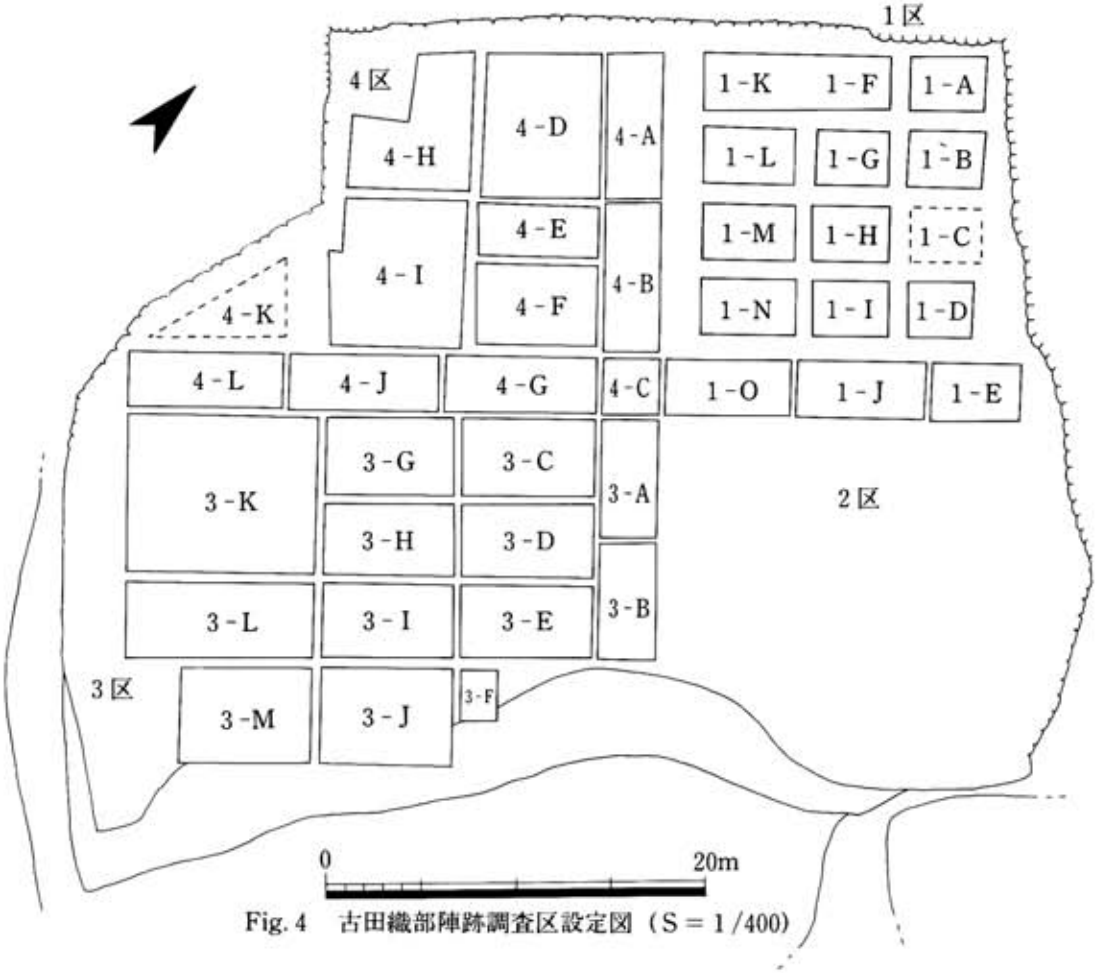
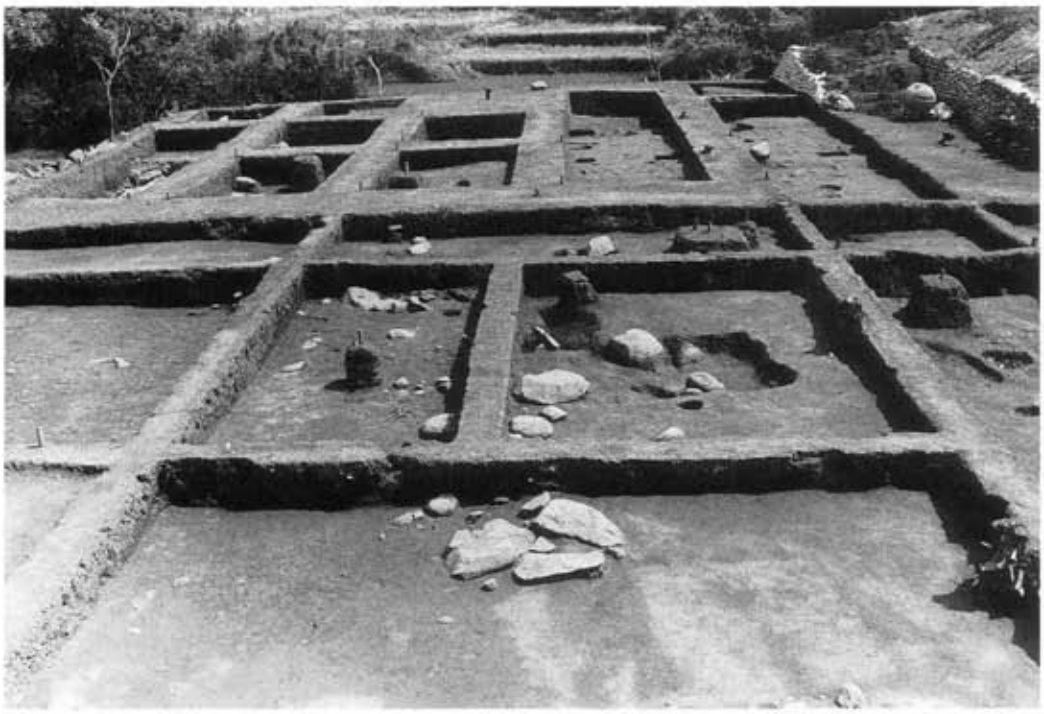


Fig. 4　古田織部陣跡調査区設定図（Ｓ＝１/400）



PL. 4　古田織部陣跡１・４調査区（南西から）

PL. 5　古田織部陣跡３・４調査区（北西から）

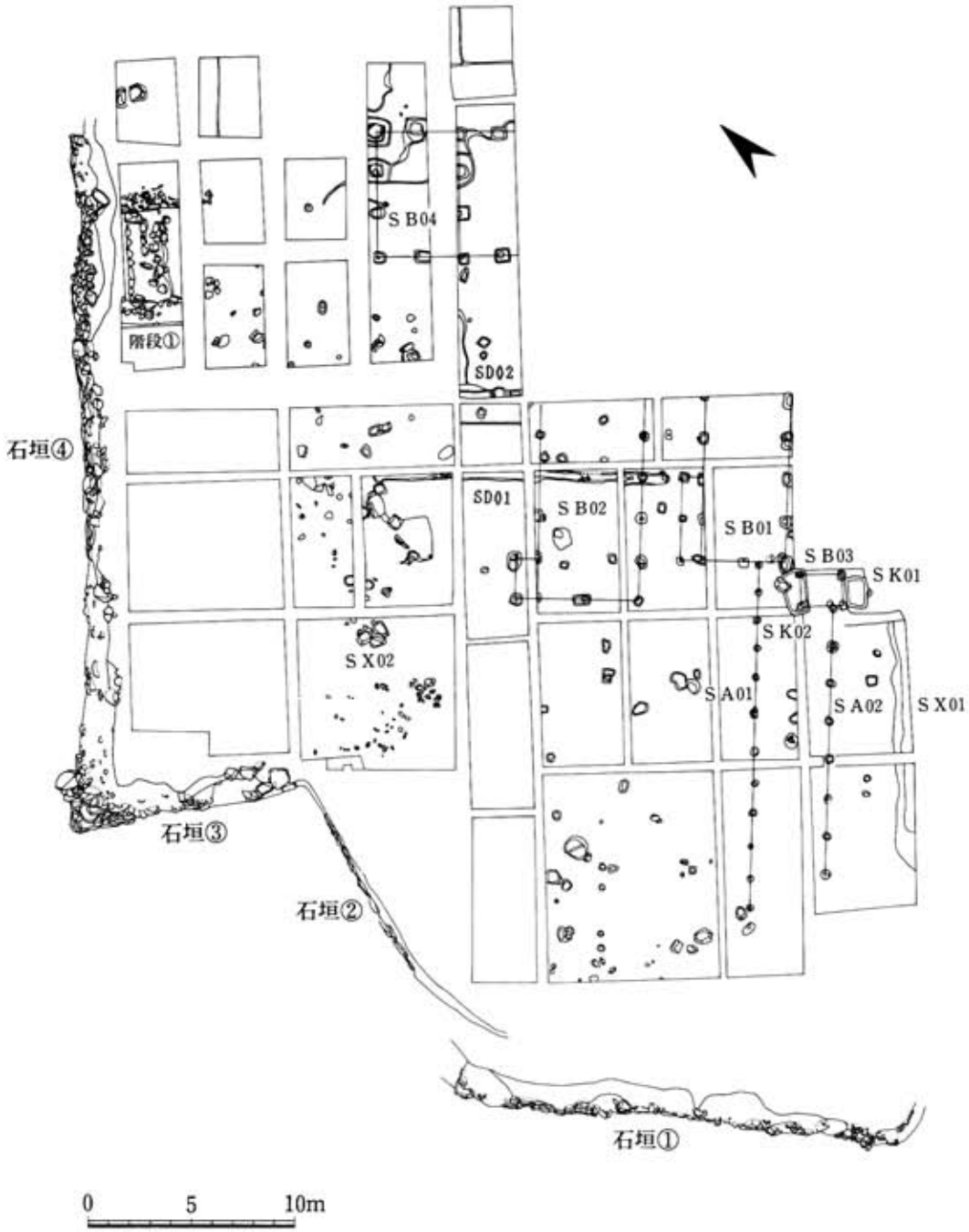


Fig. 5　古田織部陣跡遺構配置図（S＝1/300）

2．遺構の概要

今回検出した遺構のうち、掘立柱建物跡・柱穴列については、1間を2mとして以下記述する。

掘立柱建物跡は4棟あり、曲輪東側部分に集中する。

ＳＢ01掘立柱建物跡(Fig.6、PL.6・7)は、南東法面に平行して建っている。規模は4 m×8＋αm（2間×4＋α間)、西隅柱から桁行方向に1 m×4 m（半間×2間）の張り出しがつく。柱穴は、底面が縦0.5m、横0.4m前後の平面長方形のものが多い。張り出し部分の柱穴は、母屋に比べ小さい。柱穴はいずれも風化玄武岩の地山を掘り込んだ素掘りのものである。建物主軸方位は、N－48°Eにある。

ＳＢ02掘立柱建物跡（Fig.7、PL.8・9）は、建物主軸方位がN－49°EでＳＢ01掘立柱建物跡と平行し、ＳＢ01掘立柱建物跡の張り出し部分と2 m（1間）の間隔がある。規模は5 m×8＋αm（2.5間×4＋α間）あり、梁行は5 m（2.5間）を二ツ割にし、柱間は2.5mずつである。ＳＢ01掘立柱建物跡と同様に西隅に1 m×2 m（半間×1間）の張り出しがつく。桁行の南西から4番目の柱穴は、ＳＤ01溝跡と重なっている。柱穴はＳＢ01掘立柱建物跡より規模はやや小さく、平面隅丸方形のものが主体をなすが、長方形や不整円形のものもみられる。

ＳＢ03掘立柱建物跡（PL.10）は、ＳＢ01掘立柱建物跡の南隅柱に隣接している規模1.5m×2 m(3/4間×1間)の小さな建物跡である。主軸方位はN－43.5°WでＳＢ01掘立柱建物跡とほぼ直交しており、ＳＫ02土壙と切り合う。

ＳＢ04掘立柱建物跡（PL.11・12）は、1区南西部から2区にかけて延びる建物跡である。規模は6 m×6＋αm（3間×3＋α間)、建物主軸方向はN－43°Wで、ＳＢ01・02建物跡とは直交する。建物北東側から4 m（2間）のところに仕切りの柱穴が、梁の柱穴と対峙して並んでいる。柱穴は、底面が縦0.6m、横0.5m前後の平面長方形であり、柱穴の規模はＳＢ01・02掘立柱建物跡に比べ大きい。北隅柱周辺では盛土による成形がみられ、柱穴も盛土部分から掘り込み、地山面に達している。

掘立柱建物跡のうちＳＢ01・02・04掘立柱建物跡は、2区の方向へ延びており、今回までの調査では全容を摑むまでに至っていない。

柱穴列は1区南東側に2条あり、ともに方位をN－49°Eにとり、平行している。

ＳＡ01柱穴列（PL.13）は、ＳＢ01掘立柱建物跡の南東側に主軸方位を同じにして取りついている。長さ16.5m（約55尺）の間に柱穴は12個あり、南西より6個までは1.5m（3/4間)、次が2 m（1間)、10個まで再び1.5m（3/4間)、次の2つの柱間は1.35m（4.5尺）と均等ではない。柱穴の平面は円形や隅丸長方形であるが、掘立柱建物跡建物跡の柱穴に比べると小規模である。

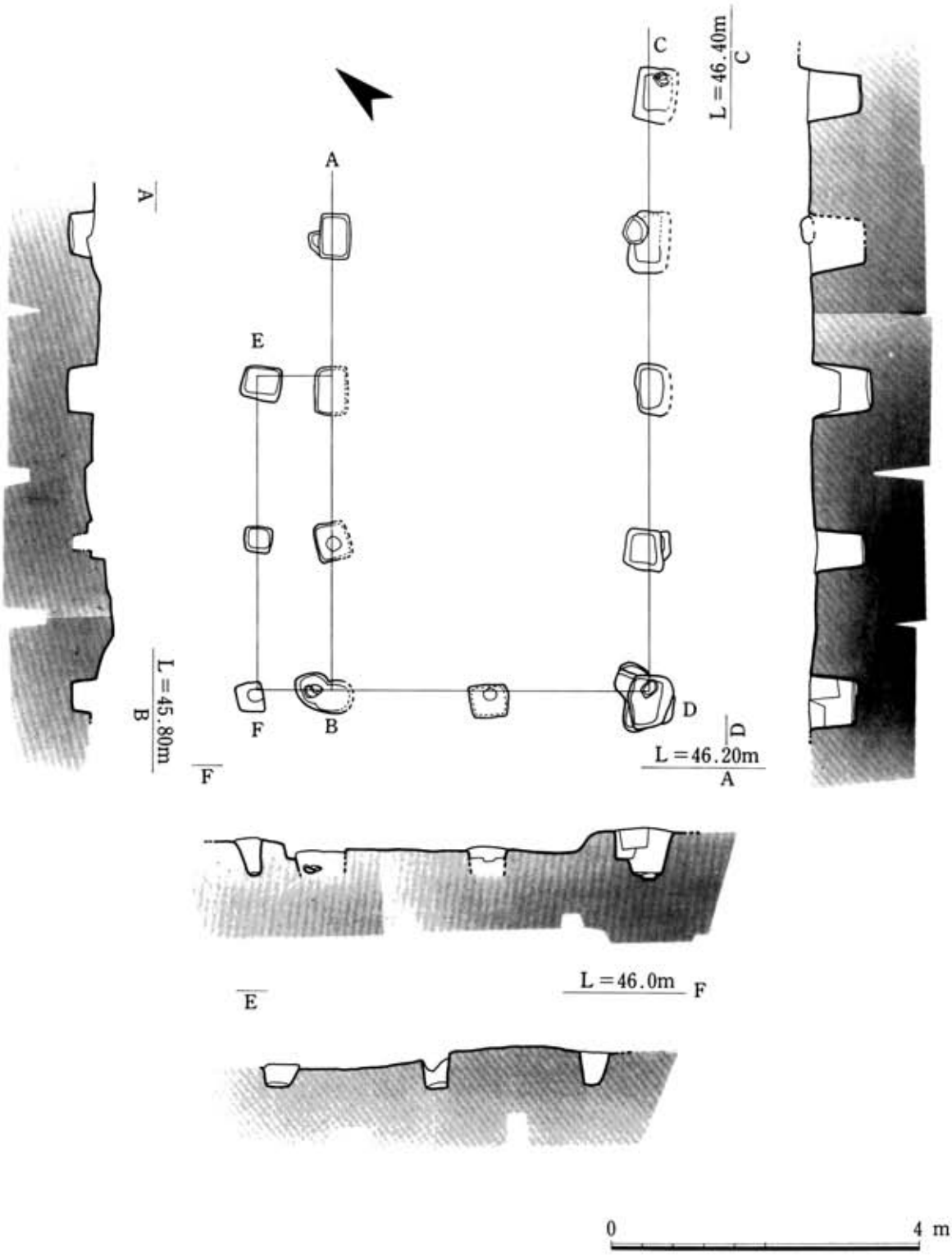
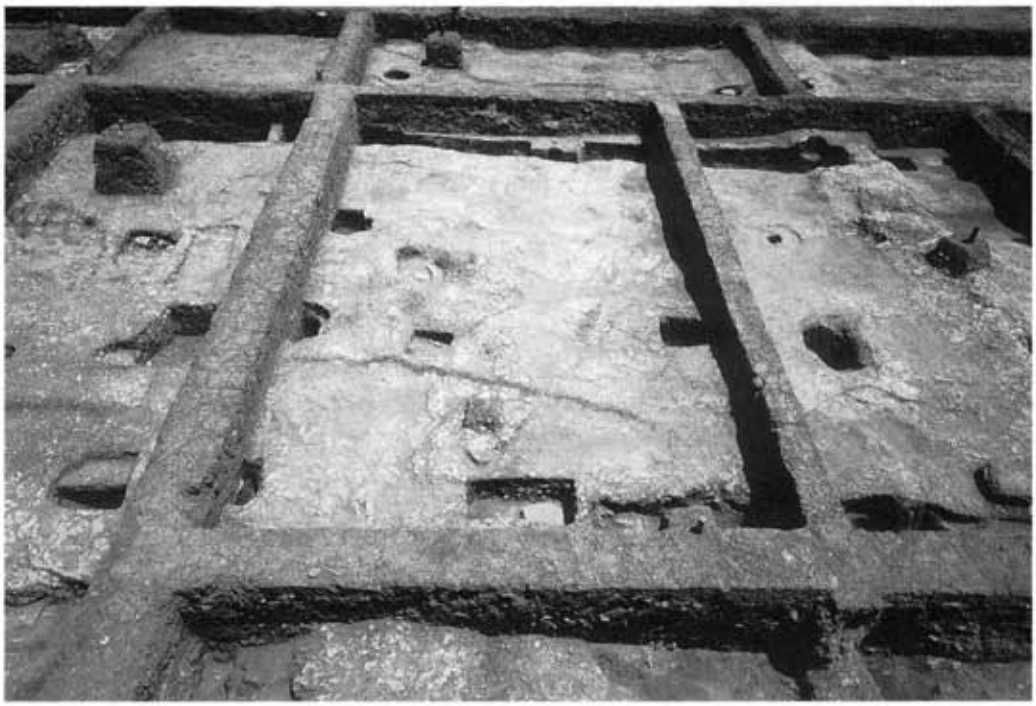


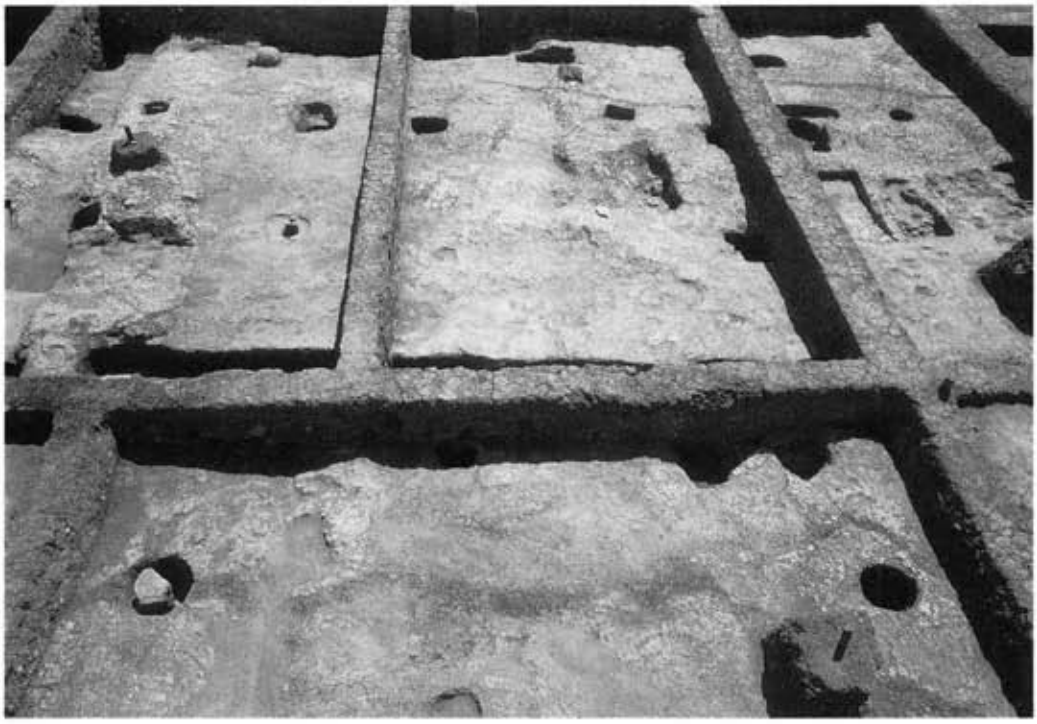
Fig. 6　ＳＢ01掘立柱建物跡実測図（Ｓ＝１/80）

PL. 6　ＳＢ01・02掘立柱建物跡（南西から）

PL. 7　ＳＢ01掘立柱建物跡（北西から）



PL. 8　ＳＢ02掘立柱建物跡（南西から）



PL. 9　ＳＢ02掘立柱建物跡（北東から）

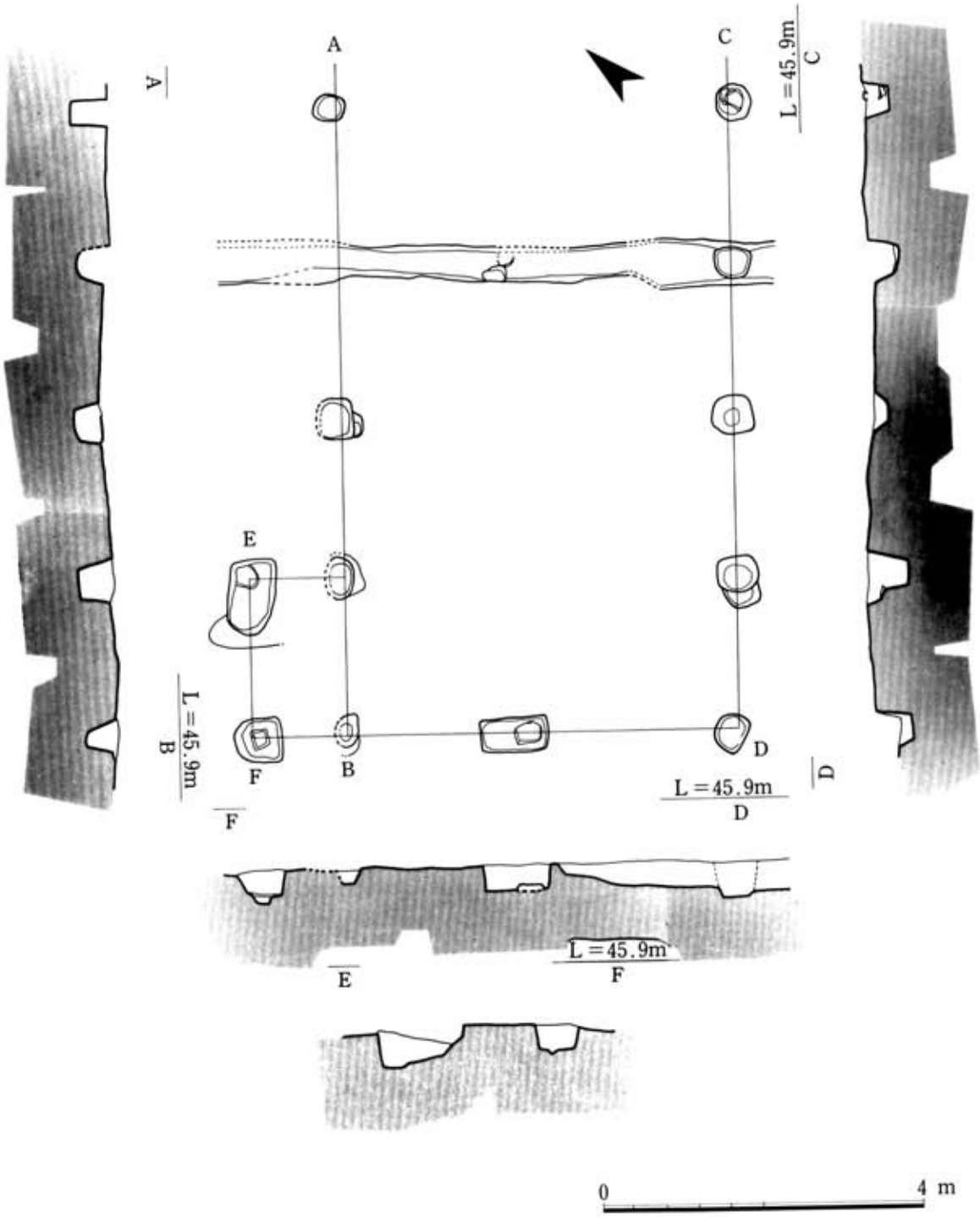
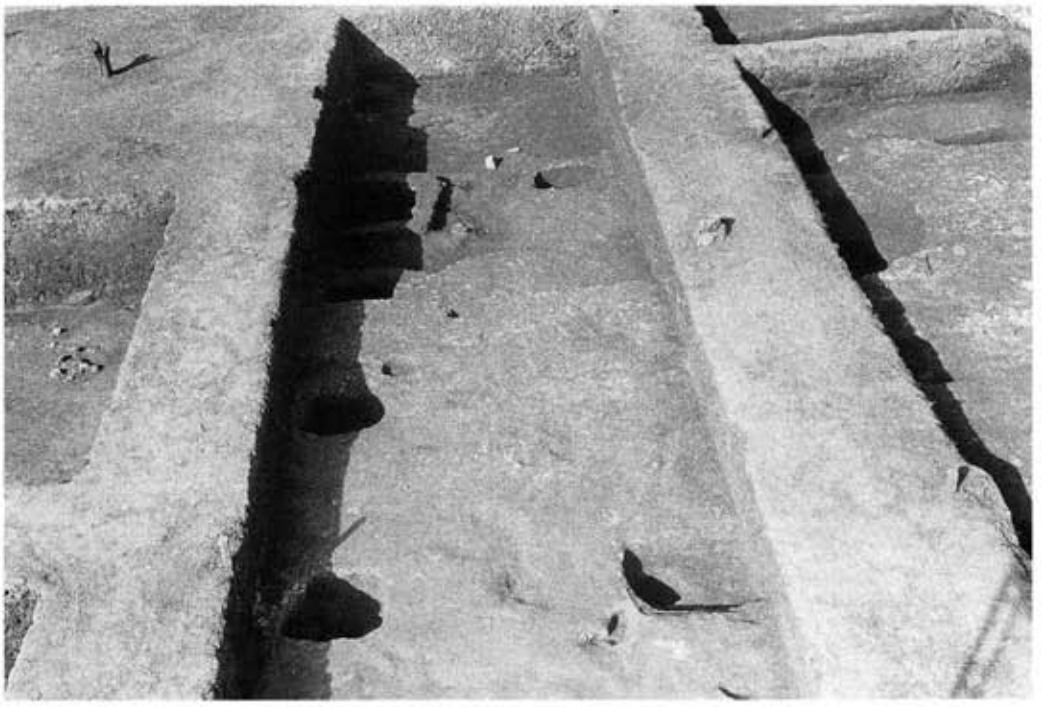


Fig. 7　ＳＢ02掘立柱建物跡（Ｓ＝1/80）

PL.10　ＳＢ03掘立柱建物跡・ＳＫ01・02土壙（南西から）

PL.11　ＳＢ04掘立柱建物跡(南東から)



PL.12　ＳＢ04堀立柱建物跡(南西から)

PL.13　ＳＡ02柱穴列(南西から)

PL.14　ＳＡ01柱穴列(南西から)

PL.15　ＳＫ02土壙（南西から）

PL.16　ＳＫ01土壙（南西から）

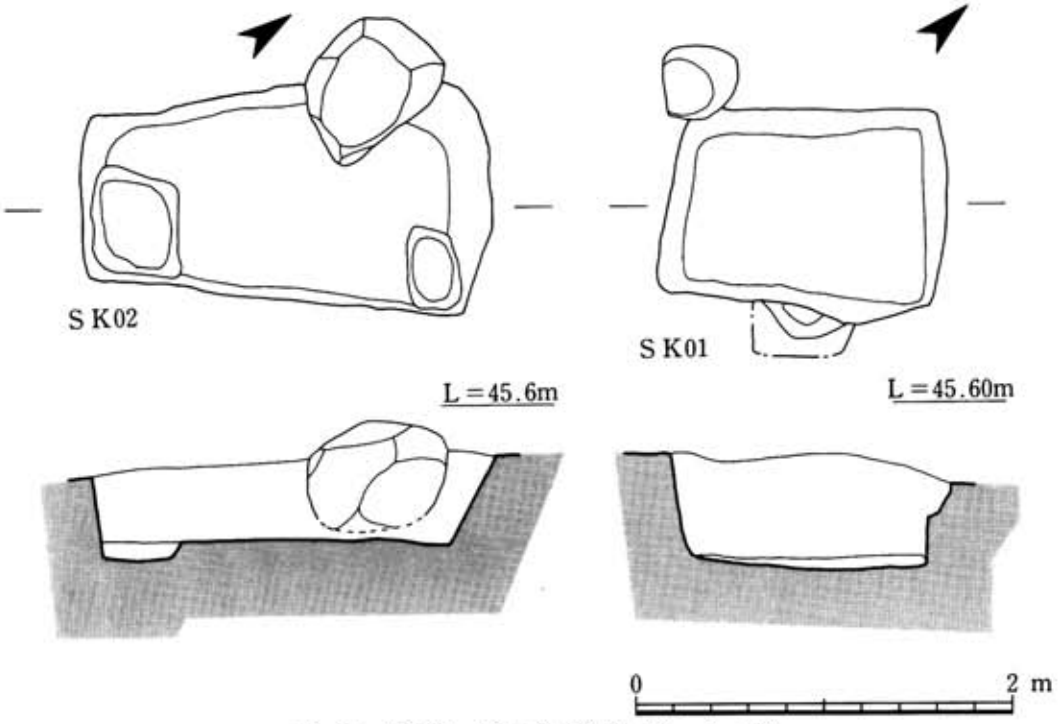


Fig. 8　ＳＫ01・02土壙実測図（Ｓ＝１/40）

ＳＡ02柱穴列（PL.14）は、ＳＢ03掘立柱建物跡南東側に直交して取りつき、長さ12.9m（約43尺）の間に柱穴が８個あり、柱間を７つにほぼ均等割りしている。柱穴の平面は円形が主でＳＡ01柱穴列のものと規模はほぼ同じである。また、ＳＡ01柱穴列との間隔は3.6m（約12尺）あるが、柱穴の位置は対峙していない。

土壙は、１区南東側ＳＢ03掘立柱建物跡に接して２基ある。

ＳＫ01土壙(Fig.８、PL.10･16)は、ＳＢ03掘立柱建物跡の南東側にあり、長軸方位がＮ－47°ＥとＳＢ03掘立柱建物跡の梁と平行する。平面は長方形で、底面の規模は長さ1.24m、幅0.9mある。上面からの深さは0.66m、出土遺物はない。

ＳＫ02土壙（Fig.８、PL.10･15）は、ＳＢ03掘立柱建物跡の北西側柱穴と切合う。平面は隅丸長方形で、底面の規模は長さ1.82m、幅0.92m、上面からの深さ0.51m、出土遺物はない。

石垣は曲輪の三方を囲み、北西隅は入角状になっている。石垣は南西側より順に石垣①からの番号を付している。

石垣①（Fig.９、PL.17）は、曲輪南西端に位置し、長さが21.5mある。北西から南東へ上る斜面上に石垣は築かれ、北西側根石付近で標高42.4m。南東側で標高44.7m、石垣の高さも北西側で高く、南東側では地形に摺りつくように徐々に低くなっている。石垣は部分的に破壊を受けているが、北西側では２ｍ以上の高さを持っていたものと思われる。北西側では角石も残り、幅0.9m、高さ0.5m前後の玄武岩を用いた野面積みにより石垣を構築しているが、南東側では石材も小さめとなり、部分的に乱れがみられる。方位はＮ－37°Ｗである。

石垣②は、辺が曲線であり、石積みも当時のものとは考え難い。石垣①の角石と石垣③の状況からみれば、石垣②の後側に石垣ラインが想定できるが、今後の調査を待ちたい。

石垣③（Fig.11、PL.18･19）は、曲輪北西隅の入角部分にあり、南西に面している。石垣①同様地形にあわせて石垣を構築しており、北西側根石付近で標高41m、南東側では44.8mある。石垣の長さは11.1m、北西側角部は石の緩みが大きいものの７石、高さ2.5m程残存しているが、当時の高さは４ｍ程と推定できる。南東側で地形に摺りつき、石垣も１石分しかない。石材は、石垣①と同規模のものを用いているが、角部では幅0.7m、高さ0.6m、奥行1.2m前後の大きめのものを組み合わせている。また南東側では幅1.25m、高さ１ｍと石の最も広い面を表にする方法もとっている。方位はＮ－52°Ｗである。

石垣④（Fig.10・11、PL.19～22）は、曲輪北西端に位置する。曲輪北西辺は長さ44mあるが、このうち33.5mについて石垣は残存し、北東側では破壊が大きく角部もほとんど残っていない。石垣④中央部前面には、標高44m、幅18mで小曲輪がつき、この小曲輪へ向かって左右から石垣は上る。小曲輪に面する石垣部分が比較的残りは良く、高さは1.4m前後ある。幅1.3m、高さ1.1m前後のその石の最も広い面を表に出した石材を、一見規則性があるように配し、その間は小ぶりの石材を５～６段積むという変化に富んだ石垣の構築を行っている。Fig.10に

示すとおり、石垣北東端から3.5mのところに幅0.3m、高さ1.05mの立石があるが、これは後述する階段の角石であり、この部分から南西側へ4.2m間の石垣は、ミカン畑造成の際新たに築かれた石垣である。方位はN－48°Eにとる。

石垣①～④の他に、曲輪北東辺にも石垣④から続く石垣、また石垣④前面の小曲輪にも石垣があるが、今回の調査対象から外れているため次回に報告したい。

階段 (Fig.12、PL.23～25) は、1－F区に位置し、石垣④前面の小曲輪へ下る通路として作られている。階段の幅は4.2mと広く、この陣の主要な通路である可能性がある。階段上部は削平を受けているが、下部に3段の石段が残っている。蹴上げは0.2m前後と比較的低く、踏面は奥行が0.7m、前面に面を揃えた8個の石を置き、さらに踏面には玉砂利を敷いている。側面は幅0.7m、高さ0.5m前後の偏平な石を立て、裏栗には幅約1mでこぶし大の礫を使っている。階段周辺からは多くの瓦片が出土しているが、瓦の伴う遺構は階段付近で検出できていない。

その他の遺構としては、溝跡・集石・玉砂利等がある。**溝跡**は、SD01・02溝跡の2条あるがSD02溝跡は1－O区で一部検出したに過ぎず、全容はわからない。**SD01遺跡** (PL.27) は、3－D区から4－F区までの長さ14.6mあり、SB02掘立柱建物跡の梁方向と平行する。幅は0.4～0.6m、前述したようにSB02の柱穴と重なる部分がある。SD01溝跡とSD02溝跡の間隔は4m（2間）あり、方位は同方向にとっている。この2つの溝は掘立柱建物跡との関連性が窺える。**SX02集石** (PL.26) は、4－I区にある。1区階段南部から4区にかけては、掘立柱建物跡等の遺構は検出できていないが、長さ・幅とも0.5m前後の石が点在する。SX02集石は、長さ0.65～0.95m、幅0.35～0.62mの石が4個固まり、周辺には0.3m前後の礫がある。**玉砂利**は、曲輪生活面が撹乱を受けており、遺構としては3－J・M区、4－I区にみられるのみであるが、撹乱層や曲輪周辺にかなりの玉砂利があり、広い範囲に玉砂利を敷いていたものと推定できる。3－J・M区では径が0.03～0.07mの小さなものを、長さ10m、幅0.7mの部分で検出し、4－I区では3－J・Mより大きめの0.1×0.15m前後の玉石を敷いている。

この他に曲輪の成形状況がI区トレンチの土層で観察することができる。1・2区については盛土による成形を行っているが、特に1－H区 (PL.28) では、黒褐色の旧地表土の上に盛土を行った様子がよくわかる。

遺物は、他の陣跡同様調査面積に比べ少ない。陣跡関連のものとしては1－F区周辺の瓦類の他、土師器小皿が出土しているのみである。陣跡以前の遺物としては、1区および4区の黒褐色土中より弥生土器片が出土しており、1－H、4－B・E・I区に多くみられ、陣屋構築以前の生活の一端が窺える。

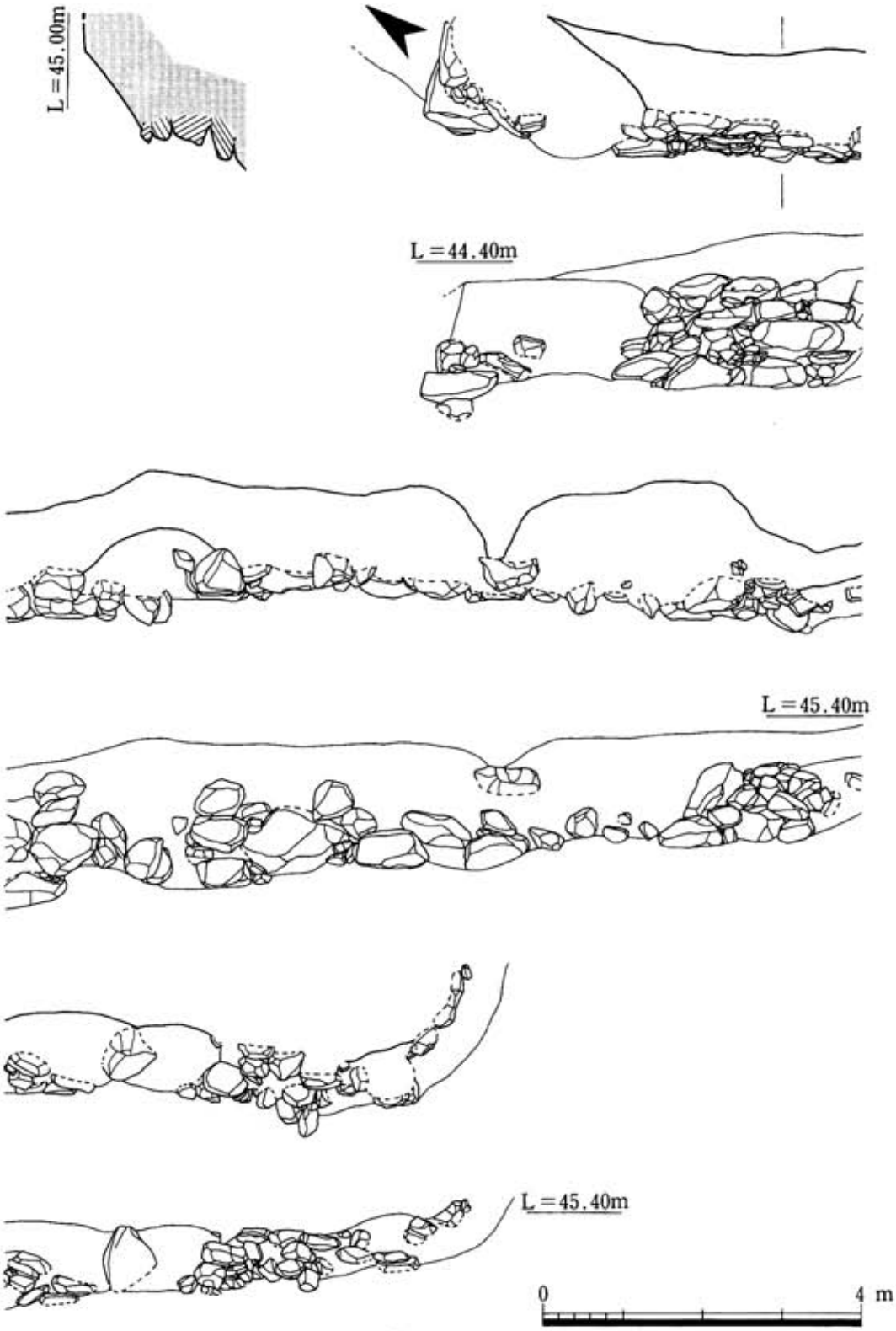


Fig. 9　石垣①実測図（S＝1/80）

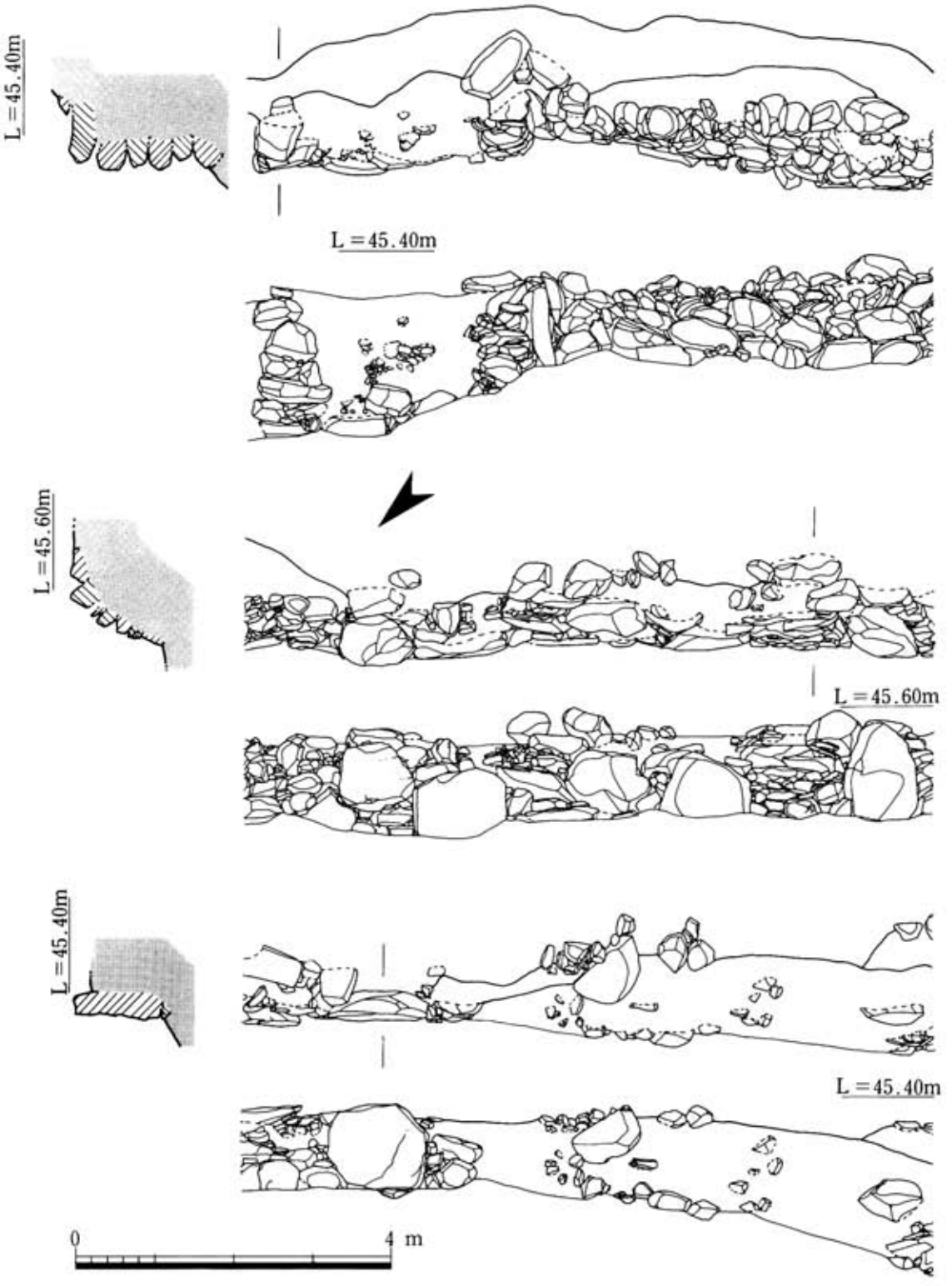


Fig.10　石垣④実測図（S＝1/80）

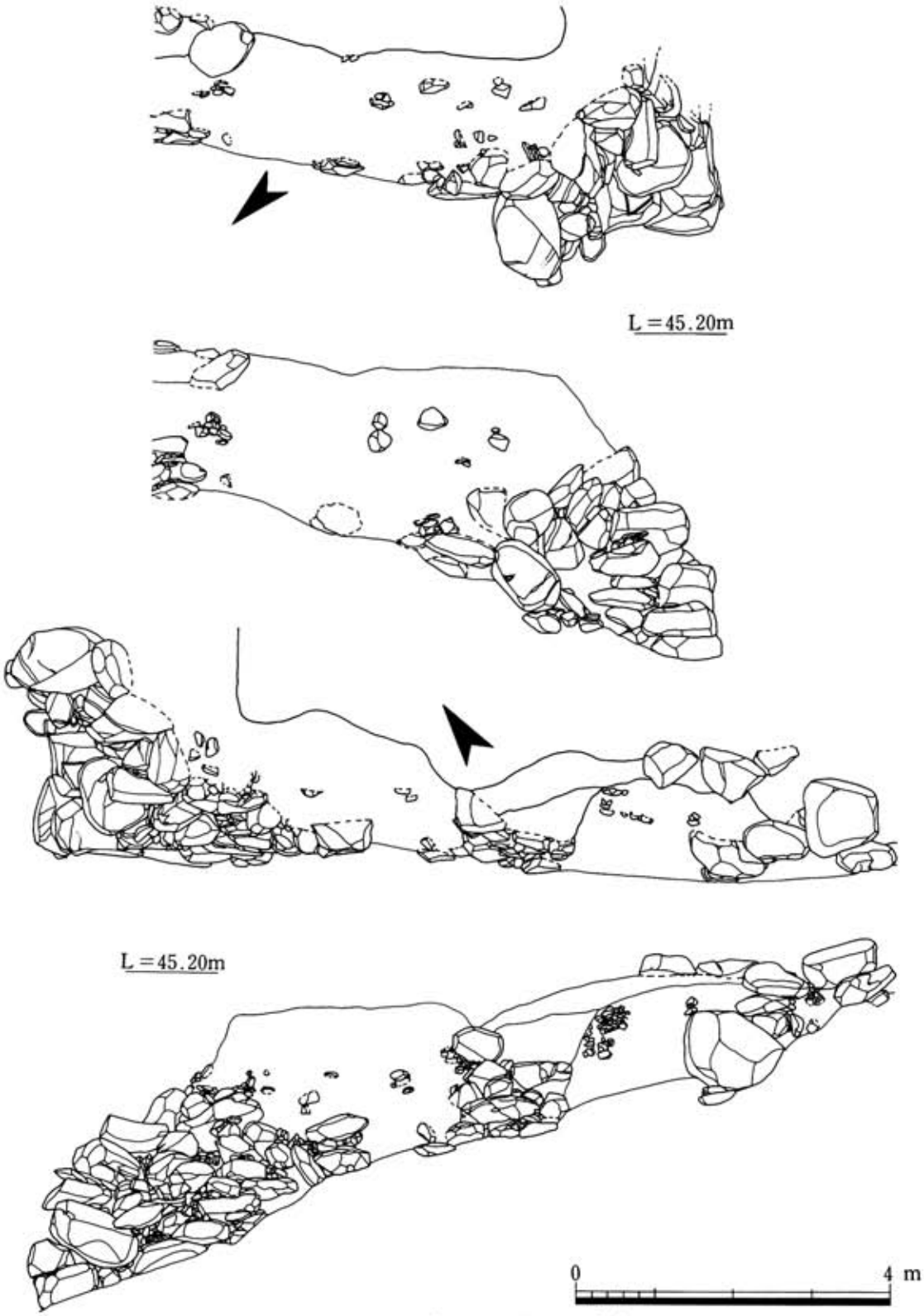


Fig.11　石垣④・③実測図（S＝1/80）

P L. 17
石垣①（南から）

P L. 18
石垣③（南西から）

P L. 19
石垣③・④角部
（南西から）

PL.20
石垣④（北から）

PL.21
石垣④（北西から）

PL.22
石垣④（西から）

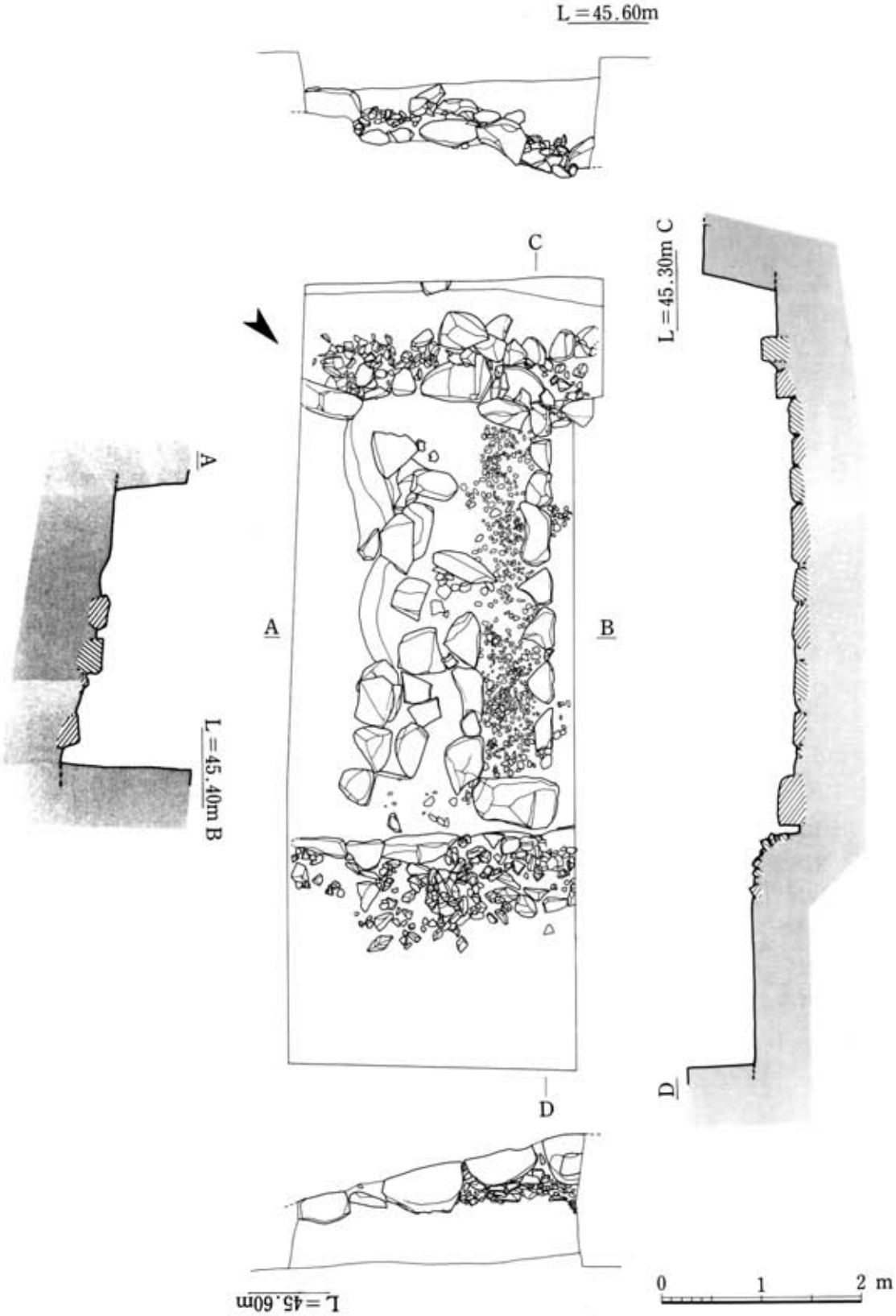


Fig.12　1－F区階段実測図（S＝1/40）

PL.23
1－F区階段
（南西から）

PL.24　同
（北東から）

PL.25　同
（南西から）

P L.26
4区集石状況
（南西から）

P L.27
S D01溝跡
（北西から）

P L.28
1－H区土層状況
（南東から）

III 小　結

茶人として著名な古田織部（重然）は、織田信長、豊臣秀吉に仕え、天正13年（1585）に従五位下織部正に叙任されている。千利休に茶道を学び、秀吉の死後関ヶ原の戦では東軍に属し、その働きを認められ徳川家康から行賞を与えられ、所領とあわせ１万石を知行している。その後将軍秀忠をはじめとする諸大名の茶の師匠を勤めるが、元和元年（1615）大阪夏の陣直後、豊臣方に内通したという罪に問われ、同年自刃しその生涯を閉じている。文禄・慶長の役に際しては、「秀吉公名護屋御陣之図ニ相添候覚書」等文献[註1]によると、後備衆として300騎の軍勢で名護屋の地に参陣し、「二俣」という地名に陣屋を構えている。今回調査を行った古田織部陣跡は「名護屋古城之図」[註2]等に描かれている各大名の陣の配置図及び陣跡の規模より比定がなされているが、今までのところ「二俣」という地名は残っていない。

古田陣跡は、名護屋城跡から南へ約500mと近く、要所の位置にある。II－１ですでに述べているが、この陣跡は丘陵の先端部に最も明瞭な曲輪を持っている。曲輪南東部の一段高い丘陵上にも玉石等は見られるが曲輪としての区画ははっきりとせず、丘陵頂部の平坦面も狭い。さらに南東部では丘陵上に広い平坦地があるが、農業基盤整備事業に伴い一部確認調査を実施[註3]した際には遺構は確認されていない。ただ丘陵の北東側には帯曲輪状の平坦部もあり、今の段階では今回調査対象とした曲輪が主体部と断定することはできないが、古田織部の軍勢が300騎ということを考えあわせれば、陣の規模はさほど大きいものとは言えず、主要な部分であることには違いないと思われる。曲輪は丘陵先端部を削平し、盛土によって平坦面を広くとり、三方を石垣によって区画している。１区では、土層断面により旧地表土及び盛土状況が観察できる。石垣の崩壊はかなり著しいが、石垣③と④の隅角部は半分程残存している。石垣④の中央部小曲輪に面する部分では、石の最も広い面を表に出した石材を規則性があるように配し、その間は小ぶりの石材を５～６段積むという変化に富んだ構築を行っており、このような構築は名護屋城跡東出丸内、豊臣秀保陣跡[註4]第一陣枡形に見ることができる。

曲輪内で検出した遺構には、掘立柱建物跡・柱穴例・土壙・溝跡等がある。曲輪内部はミカン園造成によりかなりの撹乱を受けており、当時の生活面が残っているのはほんの一部にしかすぎない。幸いなことに、ここの建物が礎石建物でなく掘立柱建物であったため、その概要を知ることができた。掘立柱建物跡、柱穴列については、今回１間を２m（約６尺５寸）で記述しているが、その尺度については他の陣跡とともに今後の検討課題である。掘立柱建物跡は４棟あり、曲輪の東側部分に集中している。建物跡は、それぞれが平行もしくは直交して建っており、ＳＢ01・02・04掘立柱建物跡の規模が大きい。ＳＢ01・02掘立柱建物跡には西隅に張り出しがつき、ＳＢ04掘立柱建物跡には仕切りがつく特徴が見られる。この３棟の建物は、いずれも２区へ延びており、今までのところその規模・性格とも摑めていないが、今後の調査結果

によってはひとつの建物になる可能性がある。これまでの陣跡の調査では、堀秀治陣跡の大手曲輪で掘立柱建物跡を検出しているが、建物の規模は古田陣跡に比べ小さい。また、堀秀治・豊臣秀保陣跡第一陣の主要曲輪は礎石建物であり、曲輪の性格づけとともに建物の比較という点からも注目される。柱穴列は、平行して２条あり、ＳＢ01・03掘立柱建物跡に直交している。当初ひとつの建物になることも予想したが、柱間に相違があり、ここでは柱穴列としている。塀の可能性が高い。溝跡はその一部を検出したにすぎないが、特にＳＤ01溝跡はＳＢ02掘立柱建物跡の柱穴と重なる部分があり、建物との関連も検討しなければならない。以上の遺構については１～３区に集中しているが、４区には集石とその周辺に飛石状の偏平な石があるのみである。飛石状の石は、撹乱を受けていることもあり、元位置かどうか不明なものが多い。ただ建物が東側に集中することにより、４区付近は庭的空間も考えられる。

今回の調査結果について若干まとめてみたが、２区の調査や曲輪北西側にとりつく小曲輪の調査が残っており、今の段階では十分な検討はできない。ただ古田織部陣跡がこれまで調査した豊臣秀保・堀秀治・加藤嘉明陣跡等とは違ったタイプの陣跡としてとらえることができ、名護屋城跡並びに陣跡の全体像を考えるうえにも好資料を提供していると言える。

註

1．中村質「史料解題」『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡３』佐賀県文化財調査報告書第81集
　佐賀県教育委員会　1985年

2．鍋島報效会所蔵

3．昭和61年度佐賀県教育委員会調査

4．多々良友博編『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡２』佐賀県文化財調査報告書第72集
　佐賀県教育委員会　1983年

特別史跡　名護屋城跡並びに陣跡6

— 古田織部陣跡発掘調査概報 —

発　行　佐賀県教育委員会
〒840 佐賀市城内1－1－59
発行日　平成3年3月31日
印　刷　㈲大同印刷